

アジアの 虫

第7号

2003年7月20日発行

題字：宋 貴美子

編集・発行 アジア児童文学日本センター

第7回アジア児童文学大会実行委員会発足

7月9日 第1回実行委員会で大会開催要項を決定

第7回アジア児童文学大会については、これまで私どもアジア児童文学日本センターを中心にその準備が進められてきましたが、その大会もいよいよ1年後に迫りましたので、このたび大会を主催する7団体（亜細亜児童文学学会、名古屋市、大島町、名古屋市文化振興事業団、大島町絵本文化振興財団、日本児童文学者協会、アジア児童文学日本センター）の代表者から成る「第7回アジア児童文学大会実行委員会」を発足させ、去る7月9日（水）午後、名古屋市鶴舞中央図書館会議室で第1回の会議が開かれました。

会議ではまず、この実行委員会の規約を承認、大会開催要項を決定しました（「開催要項」は第2面に掲載）。実行委員会の委員は次のとおりです。

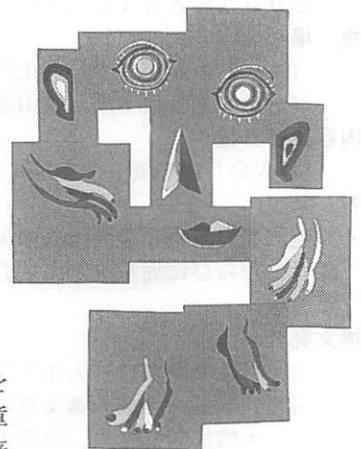
- 委員長：しかた・しん（アジア児童文学日本センター会長）
副委員長：小出隆啓（名古屋市市民経済局文化観光部長）
同：畑中圭一（アジア児童文学日本センター副会長）
同：高井 進（大島町絵本館長）
委員：山田忠雄（財・名古屋市文化振興事業団事務局長）
同：岡本昭彦（財・大島町絵本文化振興財団事務局長）
同：中尾 明（社・日本児童文学者協会国際部長）
同：和田義正（名古屋市鶴舞中央図書館長）
同：岡田敏光（財・名古屋観光コンベンションビューロー参事）
監事：井上寿彦（中部児童文学会理事）
同：平岡研二（名古屋市市民経済局文化観光部文化振興室長）

今後、大会の企画・運営、並びに大会の予算・決算は、この実行委員会を中心に行われることとなります。なお同実行委員会の事務局は、アジア児童文学日本センターに置かれることとなりましたので、ご連絡や問合せは従来どおり、春日井市岩成台8-4-1-602-404 花井方へお願いします。

論文発表を希望する方は早めに連絡を

開催要項により、国内の論文発表者は5名に限られています。そのため、大会実行委員会では論文発表者を広く募り、応募論文を審査のうえ発表者を決定いたします。論文発表を希望する方は11月30日までに論文（3000字以内）を事務局あて提出してください。

くわしいことは、春日井市岩成台8-4-1-602-404 花井都茂子（Tel.0568-95-0091）、または、京都府木津町兜台2-2-1-D404 畑中圭一（Tel.0774-72-9199）までお訊ねください。



これからの予定

- | | |
|----------|------------------------------|
| 2003年 8月 | 大会開催要項発送 |
| 11月 | 国内発表者の論文提出、月末まで |
| 12月 | 大会参加申込み、月末まで
国内発表者選考 |
| 2004年 1月 | 第2回実行委員会 |
| 2月 | 海外の発表者論文および国内発表者の最終論文提出、月末まで |
| 3月 | 論文等翻訳開始、大会資料編集 |

第7回アジア児童文学大会開催要項

趣 旨

第7回アジア児童文学大会は、1990年以来すでに6回開催されてきた大会の積み重ねを継承しながら、アジアにおける新たな児童文学のあり方を追究するとともに、各国・地域の児童文学関係者の交流と連帯を深めることを目的に開催するものである。特に本大会においては従来必ずしも十分に上げられなかった絵本を積極的に取り上げるとともに、今日アジアの人々が共通にかかえる諸問題と児童文学との関わりについても真摯に論究することを主たるねらいとしている。

大会テーマ

“アジアの子どもの本 その未来形をさぐる ～ 共生の時代に生きる子どもたちに”

- サブ・テーマ (1) アジアにおけるファンタジーの可能性と課題 (2) 絵本の創造と民族文化
(3) 共生社会・環境保護と児童文学 (4) 子どもをとりまく現状と児童文学
(5) 創作・評論・研究の相互交流

主 催

第7回アジア児童文学大会実行委員会

構成団体: 亜細亜児童文学学会 名古屋市 大島町 (財)名古屋市文化振興事業団 (財)大島町絵本文化振興財団 (社)日本児童文学者協会 アジア児童文学日本センター

後 援 (予定)

愛知県 富山県 愛知県教育委員会 富山県教育委員会 名古屋市教育委員会 日本児童文学学会
日中児童文学美術交流センター (社)日本国際児童図書評議会 (財)大阪国際児童文学館
(財)ユネスコ・アジア文化センター (財)名古屋観光コンベンションビューロー

協 賛

日本児童出版美術家連盟

期 日

2004年8月4日(水)～ 8月9日(月)

会 場

- (1) 名古屋市青少年文化センター・アートピア (名古屋市中区栄3丁目18)
- (2) 大島町絵本館 (富山県射水郡大島町鳥取50)

内容及び日程

(「大会日程概要」を参照)

対 象

亜細亜児童文学学会所属の国・地域の作家、画家、評論家、翻訳家、研究者、編集者その他児童文学関係者、ならびに児童文学に関心を有する人。なお大会プログラムの一部は、広く一般に公開する。

論文発表

- (1) 論文発表は一人15分以内とする。
- (2) 各国・地域の論文発表者数を次のとおり定める。
大韓民国 7人、中華人民共和国 7人、日本 5人、台湾 4人、マレーシア 1人、その他の国・地域から3人
- (3) 各国・地域の代表者は上記の枠内で発表者を選び、発表者氏名と論文テーマを2003年12月31日までに大会事務局へ連絡すること。なお、「その他の国・地域の3人」の選抜・調整については大会事務局が行なう。
- (4) 日本語以外の論文は、英語訳または日本語訳を添付すること、また日本語の論文の場合は、英語訳を添えることとする。
- (5) 論文の提出期限は2004年2月29日とする。論文の書式等については発表者に直接連絡する。

参 加 費

- (1) 海外からの参加者は登録料200米ドル、期間中の宿泊・食事代として400米ドル、計600米ドルを参加費として納めることとする。
- (2) 国内の参加者は登録料25000円(名古屋→大島町のバス代を含む)、レセプション経費3000円、合計28000円を納めることとする。
なお国内参加者の名古屋宿泊については、事務局からの情報等を参考に各自が宿泊先を決めることとする。また国内参加者の大島町宿泊については宿舎を準備するが、これも申込制とする。

参加申込み

- (1) 2003年12月31日までに、別記様式の「参加申込書」に記入の上、指定サイズの顔写真2枚を添えて申し込むこと。
- (2) 国内の参加者は、2004年5月30日までに登録料およびレセプション経費(計2万8000円)を指定の口座に納めることとする。

事務局

本大会の事務局は「アジア児童文学日本センター」に置く。参加申込書、論文など、すべて事務局あ送付すること。

◇所在地 〒487-0033 春日井市岩成台8-4-1-602-404 花井都茂子方

◇電話 0568-95-0091 ◇Fax 0568-91-6961

◇E-mail hanait@ezj.ido.ne.jp

その他

- (1) 大会参加者は名古屋市および大島町におけるすべてのプログラムに参加することとし、分割参加は原則として認められない。
- (2) 日本の論文発表者の選考は、別に定める要項により行なうこととする。

第7回アジア児童文学大会日程概要

月日	プログラム	会場	宿泊
8月4日 (水)	10:00～ 海外参加者受付 13:00～ 国内参加者受付 18:00～20:00 前夜祭		名古屋市
8月5日 (木)	10:00～ 開会行事 10:40～11:30 親子のミュージカル 13:00～15:30 ★講演会「アジアにおけるファンタジー」 16:00～17:30 論文発表 18:30～ 歓迎レセプション	名古屋市 アートピア・ホール	名古屋市
8月6日 (金)	9:00～12:20 論文発表 13:30～17:30 論文発表	名古屋市 アートピア・ホール	名古屋市
8月7日 (土)	バスで富山県大島町へ移動 15:00～ 大島町絵本館見学 18:00～ レセプション	大島町絵本館	大島町
8月8日 (日)	10:00～12:00 分科会 ★★A. 講演会「これからの絵本」 B. ワークショップ「手づくり絵本」ほか C. 朗読「耳で味わうアジアの絵本」 13:30～16:30 ★★★ シンポジウム「絵本の民族性を考える」 16:30～ 閉会行事	大島町絵本館	大島町
8月9日 (月)	富山県内見学		

★8月5日の講演会講師は

上橋菜穂子氏(作家・文化人類学者)および 彭 懿氏(作家・編集者)を予定。

★★8月8日午前の講演会講師は

太田大八氏(画家)および唐亜明氏(編集者・作家)を予定。

★★★同日午後のシンポジウム登壇者は

黒井健氏(画家)ほか3名を予定。

ワークショップ & ミュージカル出演者募集

第7回アジア児童文学大会の開会行事のひとつとして、2004年8月5日、親子ミュージカル「アジアの風」の上演を予定しています。アジアの昔話やアジアの詩人たちの作品をベースにしたミュージカルで、しかた・しん作の脚本がすでにできあがっており、その出演者を11月から募集します。

なおそれらの出演者は2004年4月からの「ワークショップ」に参加していただき、劇遊びや舞踊、詩の朗読などを通して、歌と踊りへの新しい“眼と芽”を開いてもらいます。

出演者の募集要項や、ワークショップの主な内容は次の通りです。

ミュージカル出演者募集要項

◇募集するのは

下記のワークショップおよび稽古のスケジュールに参加可能で、

- ① 年齢5歳以上20歳までの男女 約40名 ② 成人男女 約20名

◇募集・選考時期

2003年11月に募集を開始、2004年4月10日（土）のオーディションで選考します。

◇参加費

ワークショップ教材費として、1人 12000円

◇ワークショップ及びミュージカルの稽古日程

《ワークショップ》 2004年4月17日から7月3日まで毎週土曜日 13～16時

《ミュージカル稽古》 2004年7月10日から同31日まで毎週土曜日、及び7/25, 8/1, 8/2, 8/4.

◇ワークショップ等の会場

名古屋市青少年文化センター・アートピア（名古屋市中区栄3丁目18）

ワークショップの内容と講師

- (1) 劇遊びと演技 講師：しかたしん、ベティ早川
(2) 舞 踊 講師：梶 昌子（梶昌子舞踊団）
(3) 音楽遊び 講師：岩瀬喜則（フォークグループ鬼剣舞）
(4) 詩・絵画遊び 講師：畑中圭一（詩人）ほか
(5) 中国語やハングルで詩や絵本を読む



問合せは （有）企画・制作 楽大夢（ラグタイム）まで

〒487-0004 春日井市玉野町1661-94

Tel. 0568-51-4199

Fax. 0568-51-5855

ホームページ <http://www.f7.dion.ne.jp/~ragtime> E-mail: ragtime@f7.dion.ne.jp

[楽大夢名古屋連絡所 Tel. 052-937-9140]

プレ・イベント 展示と講演会

第7回アジア児童文学大会実行委員会が発足して、大会準備が本格的にはじまったのを記念し、名古屋市鶴舞中央図書館のご協力を得てアジアの子どもの本の展示を実施。あわせて講演会を開催しました。

展示「アジアの子どもの本」 2003年7月1日から8月3日まで（月曜休館）

名古屋市鶴舞中央図書館1F 展示コーナー

講演「孫悟空から^{ハリー}ポッター^{ボッター}まで—中国の子どもの本事情—」 成實朋子氏

7月19日（土）14:00～15:00 名古屋市鶴舞中央図書館第1集会室

講師の成實朋子氏は大阪教育大学講師。中国児童文学研究者で当センター理事。具体的な事例をたくさん挙げながら、現在の中国児童文学について興味深い話をしてもらいました。

風のたより

おめでとう リ・キョンジャ 李慶子さん

☆『バイバイ。』に児文協新人賞 ☆

昨年11月に出版された李慶子さんの『ばいばい。』（株・アートン）が第36回日本児童文学者協会新人賞を受賞し、5月17日に受賞式が行なわれました。なおこの作品は韓国で出版されることが決まっています。受賞の感想を書きいただきました。

“こんなこと初めてでえ～”

李 慶子

4月22日夕、耳をつんざくようなけたたましいベル。我が家の電話音は調整がきかないのでとにかくうるさい。受話器をとると「おめでとうございます。『バイバイ。』が第36回日本児童文学者協会の新人賞に決まりました」

声のぬしは協会事務局長の藤田氏。どうリアクションしていいのか、とっさで言葉が浮かばない。

「え～ほんとですかあ？いや～こんなこと初めてでえ～」

なんとまあ、まぬけなもの言い。

藤田さんもきっとそう思ったにちがいない。「新人賞はだれでも初めてなものですよ」とあいそのない言葉が返ってきた。そのとたん、マンガ風に描くと、わたしの顔に縦線が数本入った感じ。つまり、トホホ。

わかってる、わかってるって。やったね！受話器を置いた後、両手でピースをして私は何度も何度もウサギのように飛び跳ねた。

『バイバイ。』は1960年代の、ごく普通の在日の日常を描いたものだ。出版後「多少の違いはあっても登場人物と同じような環境にいたのは、あの時代ごく普通の我々在日の日々でした。ただただ40数年前の日々が思い返され、目を閉じてみればあの風景、におい、かおりがこの本を通して私の身にふたたび染みこんでくるのはうれしいものでした」と、同世代の男性読者から手紙がきた。うれしかった。

先に出版した「はなぐつ」は韓国の創作と批評社から。そして「バイバイ」はウリ教育から翻訳出版される。受賞が決まった日、東京国際ブックフェアのために来日したウリ教育の金社長と韓日児童文学研究会の李在靉さんと京都でお会いし、喜びを分かち合った。韓国の子どもたちは、この二つの作品をどう読んでくれるだろうか。



受賞のお祝い会も

6月29日 大阪市で

今回の日本児童文学者協会文学賞は協会賞に中川なをみさん（『水底の棺』）、新人賞に李慶子さん、さらに評論新人賞に相川美恵子さん（「『うすらでかぶつ』にみる読み開き方—1970年代の入口をふりかえる」）と、関西から3人の受賞者を出したということで、作家の今関和子さんをはじめとする世話人により、3人の方の受賞を祝う会が6月29日（日）午後5時から大阪市のホテル阪神で開かれました。

作家の川村たかし氏、あまんきみこ氏、研究者の中川正文氏など、関西在住の作家、研究者など百名を超える参加者が、3名の方の受賞を祝いました。

李慶子さんには当センターの畑中副会長、詩人の李芳世氏から祝福のことばがありました。

第2回韓国・朝鮮児童文学セミナー

4月5日 神戸市で

オリニの会とオリニほんやくの会の主催による第2回韓国・朝鮮児童文学セミナーが、4月5日午後神戸学生青年センターで開かれました。

金永順（梅花女大大学院）氏の「1960年代に日本と韓国で描かれた家族像—山中恒と李元寿を中心に」、仲村修氏の「日本の新聞雑誌のなかの韓国・朝鮮児童文学」、きどのりこ氏の「『葡萄色のノート』と歴史感覚」などの発表のほか、ソウル在住の梁美華氏、大竹聖美氏の代読発表や、梁玉順氏ほかの絵本や民話の翻訳朗読も行なわれました。

ソウルの風

—仲村修さんのメール通信—

9泊10日のソウル滞在をおえて、昨日（5月31日）の夜、ぶじ帰ってきました。

8か月ぶりの韓国も日々変化しつつありました。韓国の経済成長の幕開けをつげた3・1高架道路は老朽化のためか撤去され、かつて埋めてしまった清溪川が再出現するのだそうです。なごりを惜しんで高架道路をはしるマラソン大会もあり、たまたまスタート地点でちょっと見学。

いろんな出版社にもおじゃましました。そのうち、絵本をたくさん出しているポリ出版社にはキョレ児童文学会の沈明淑さんが就職していて、嬉しい再会をしました。明日は出版社の全員で田植えに出かけると聞いて、感動しました。自然科学関係の絵本が多い出版社だからかもしれませんが、日本の出版社で社をあげて田植えに出かける出版社がいったいあるだろうか、考えてみました。

創作と批評社には、『創批オリニ』の創刊号と原稿料をくれるというので出かけました。小生発掘の童話に短い解説をつけましたが、これの原稿料でした。思いもかけない、誠にありがたいことでした。創刊辞は韓国児童文学（界）の到達点と問題点を手際よくまとめ、編集者の覚悟と読者の参加をよびかける、なかなか格調高い文章でした。畏友たちのむれつどう韓日児童文学研究会の諸氏も元氣な様子でした。

楽しみにしていた龍仁の湖岩美術館には、時間の関係でいけませんでしたが、そのかわり、仁寺洞で韓国画展をしている孔画廊を偶然見つけて、1920・30年代（植民地時代）に活躍した画家たちの作品を楽しみました。なかでも金圭鎮の「実景叢石全図」

（1920年）は、画家が実際に海上から海金剛（金剛山の東海岸部分）を見て描いたもので、紙幅が3.35メートルもある大作で圧巻でした。作品をほめちぎっていたら、画廊の人が定価1000円なりのパンフレットを、どうぞと言って下さいました。この画廊に2日通いましたが、ひきつけられる作品が一日で変わるのにはびっくりしました。おそらく自分の目が、寝ている間に変化をおこすのでしょうか。3日行けばさらに変わるだろうと思います。なんど見てもあきない作品は、自分にとって相性のいい、忘れがたい作品ということになります。この画廊は日本の東洋画家たちとも名古屋で交流展をひらくそうです。

アツと思ったことといえば、高校生が電車の中でうたっていた歌です。かの有名な金素月の名詩に現代風のアップテンポのリズムをつけてうたっています。数ヶ月前に売り出されて若者にけっこう売れているとか。やはり韓国は詩の国ですね。

『ハラボジのタンベトン・II』 の出版を祝うタベ

3月22日 大阪市で



濟州島の民話をもとにした創作絵本『ハラボジのタンベトンII』（大阪・東方出版）の出版と、同絵本I、IIのハングル版（ソウル・汎友社）の出版を記念して、作者の高貞子（コウチョンジャ）氏と画家の金石出（キムソッチュル）氏を祝福するタベが、3月22日、大阪市天王寺区のホテル・アウィーナで開かれました。

韓丘庸氏のあいさつに続いて、女優・新屋英子さんの朗読、金姫玉さんの舞踊「サルプリ」が演じられたあと、画家金石出氏の師、河井勝三郎氏の音頭で乾杯。たいへん和やかで、かつ、にぎやかなお祝いの会がくり広げられました。韓国から駆けつけられた汎友社社長をはじめ、さまざまな立場の人たちからのスピーチに加えて、カヤグムの二重奏、チョッテの独奏など数々の民族音楽が演奏され、すばらしい宴となりました。当センターからは畑中副会長がお祝いのことばを述べました。

在日二世の高貞子さんが、濟州島出身のお年寄りたちから、代々語り継がれてきた民話を聞き取り、それをもとに書いた文章に、同じく在日二世の画家・金石出さんが独創的で、しかも民族の美的伝統を強く感じさせる銅版画を制作、みごとな絵本を完成されたわけですが、しかもこの絵本が韓国で出版されたことはたいへん喜ばしいことです。

ハラボジのタンベトン

高貞子・文 金石出・絵 (東方出版)

梓 加 依

「神の島」濟州島の伝承物語が故郷へ帰った。濟州島は「神の島」と呼ばれ、朝鮮半島でも独特の伝承と文化を持つ。この島には不幸な歴史がある。

今も世界は戦争の中にあるが、他国の介入により国が分断され、同じ民族が争う結果になる歴史は悲劇である。思想、政治が違うことで同じ民族が対立することは、親子、兄弟、縁者を無残に引き裂く。

濟州島もこの例に洩れない。悲劇的な歴史の中で、当時そこにいた人々はほとんどといってよいほど命を絶たれたといわれる。それと同時にこの島に伝わる独特の文化も、語りつがれた物語も途絶えてしまったのではないかと思われる。しかし、その伝承されたものは、在日の一世の中にしっかりと残されていた。

自分の中に流れる民族の血と心に気づいた一人の童話作家が、自分のルーツを求めて、濟州島出身の一世たちから物語を聞き取り始めたのである。

この作家は大阪に住む高貞子である。彼女はこのセンターのメンバーでもある。10年の年月をかけて2冊の絵本にして出版した。そして、その一冊目が韓国に里帰りをしたのである。韓国の出版社「汎友社」が高貞子の『ハラボジのタンベトン』1作に目を留め、今年、韓国で出版したのである。

この出版に対して、朝鮮半島が危なかしげな状況にある今、多くの人が朝鮮半島と日本を結ぶものとして喜んでくれている。しかし、この出版はそれだけではないのである。高貞子が為したこの絵本の出版は、途絶えようとしていた一つの民族の伝承と文化を、危ういところでくいとめ、伝え残すという大きな仕事をしたことに意義がある。

これからも、単に在日作家の絵本出版ということだけではなく、一世から聞き取った高貞子の手元にある濟州島の物語を3冊目、4冊目と出版していくことが、一世の故郷への思いと文化の財産を伝える若い人たちの任務なのである。在日の人たちは自分たちの宝物を大切に伝えていってほしい。

3月22日に韓国から出版関係者もかけつけ、盛大に出版のお祝い会が開かれた。10年の間に、語ってくれた多くの一世たちがすでに亡くなっている。このお祝い会は、故郷を懐かしく思いながら亡くなったハルモニやハラボジへのなによりの追悼にもなったはずである。

《この絵本についての問合せ先》

- ◇ 高貞子: Tel. 06-6717-4549
- ◇ 東方出版: Tel. 06-6779-9571

庭を出ためんどり

ファン・ソンミ文 キム・ファンヨン絵

ピョン・キジャ訳 (平凡社)

しかた・しん

日本が占領していた時代の韓国、ソウルで私は生れて育った。女中頭のオモニから、彼女のご機嫌のいい時には、いろいろ昔話を聞かせてもらった。

トッカビ、ヌクテ(山犬か狼らしい)、トラなど暗闇の世界の主人公たちの活躍に、私たち兄妹が息を吞んでいると、オモニの顔に一瞬の得意さが流れたりしたのを、今でも憶えている。

イタチもそうした英雄の一つであった。

どんなに人間たちが、その侵入を防ぐために工夫の限りをつくしても、深い暗闇から溶け出るようにあらわれて、最良のメンドリをさらって闇に消え去るイタチ。

さて、この作品、一方の雄はこうしたイタチである。対するは、庭を出ためんどり「イブサク」。ストーリーは……。やめておこう。読んでもらった方がいい。この物語、本筋では、そのイブサクの成長の物語で、それが何とも感動的なのだ。人生の枠組みを一つ、ぶっ飛ばすようなダイナミズムと独特の象徴性をもつファン・ソンミさん。

訳はこのところ、次々といい仕事を重ねているピョン・キジャさん。力のこもった訳である。

エネルギーの結晶のような厚味のある本である。

雑誌紹介

小さい旗 117号

《中国の児童文学》

陳 益作「ウサギのレックス」馬場与志子訳
車培晶作「きらめく氷の彫刻」水上平吉訳

《ニーハオ! 中国の子どもたち》

中国に翻訳された柏木・みずかみの詩「てんとう虫」「つきよ」

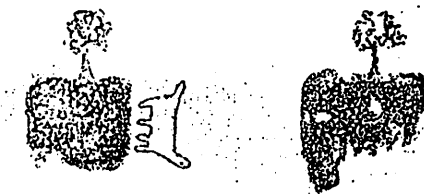
ほか

★ 連絡先

北九州市八幡東区尾倉3-7-10

水上平吉方 小さい旗の会

Tel. 093-661-4488



ペク・チャンウ詩／ハン・ジヒ絵

大竹聖美訳（古今社）

畑 中 圭 一

まずはハン・ジヒさんの絵に惹かれる。2年前に刊行された『イングンニムのみみ』も、そのソフトな色調と人物の表情の豊かさに心ひかれたのであったが、今度はその淡い色調のかもしれないぼのぼとした雰囲気「子守唄」という主題にみごとに合致している。見返しや目次頁の絵を含め、細やかな心づかいで絵本が作られていることに胸打たれる思いである。

訳者の大竹聖美氏によると、これらの絵は全体として赤ん坊の誕生と成長、さらに赤ん坊を中心とする家族の営みが四季の移り変わりと共に描かれているのだという。子どもの成長と自然とが深く関わっているという思想が根底にあるようだ。

ここに収められた22篇の子守唄は、いずれも韓国の村々に伝承されてきた唄であるが、ペク・チャンウ氏が現代語に改めたものもあるという。日本の子守唄に似ていわゆるオノマトペが多く、訳者はそれらのオノマトペをできるだけ忠実に伝えようと、工夫を凝らしている。つまり、ハングルをカタカナで表記し、その日本語訳をルビのかたちで小さく示しているのである。これと似たようなことは、日本でも方言詩の場合に用いられている。この方法が適切かどうか、見解の分かれるところであろうし、また翻訳と言う以上、もっと日本語としての表現にこだわるべきだという意見も出てくるに違いない。しかし、大竹氏が原詩の持つひびきやリズムをできるだけ忠実に伝えたいというねらいで翻訳に取り組み、また巻末に詳しい解説を載せるなど、研究者としての姿勢を貫いていることには敬意を表したい。

<古今社>

Tel. 0463-84-6925

ホームページ <http://www.kokinsha.co.jp>

雑誌紹介

ま ゆ 第90号

《訳 詩》

艾 青作「大堰河 僕の乳母」小笠原治嘉訳

★連絡先

室蘭市八丁平4-25-25

Tel. 0143-46-0757

INFORMATION

『中国児童文学』12号まもなく刊行

中国児童文学研究会の機関誌『中国児童文学』12号が7月下旬に発行されます。

編集作業の遅れから、13号の方が先に出るといふ変則的な発行になってしまいましたが、この12号では日本とも馴染みの深い女性作家謝冰心（シェ・ピンシン）の特集を組み、冰心についての論考、中国の児童文学賞のひとつ「冰心賞」の紹介、「みかんちょうちん」の新訳等を載せております。

『中国児童文学』12号及び昨年出ました13号をご希望の方は、中国児童文学研究会関西事務局までご連絡ください。一冊500円でお分けしております。また来年発行予定の14号の原稿を現在募集しております。中国児童文学について何か書いてみたい、翻訳してみたいと思っておられる方はご連絡ください。

《中国児童文学研究会関西事務局》

大阪市城東区今福2丁目10-18-409

寺前君子方

Tel. 06-6932-7581

アジアの本の会2003年全点リスト

明石書店、てらいんくなど16社が加入する「アジアの本の会」が全点リストを刊行した。冒頭に14人の専門家による「私の選んだアジアの本」が掲載されており、その中に中国児童文学研究者の河野孝之氏も。

《連絡先》

明石書店内 アジアの本の会

Tel. 03-5818-1171

<http://homepage1.nifty.com/book-asia>

あとがき

畑中圭一

日本での2回目のアジア児童文学大会がいよいよ1年後に迫りました。今回の大会では、絵本を積極的にとりあげること、親子ミュージカル、講演会、シンポジウムなど公開プログラムを盛り込んでいることなど、いくつかの新しい試みを加えて、アジアの児童文学に対する一般の理解を広げようとしています。会員の皆様にはぜひ参加いただきますとともに、大会の周知方についてもよろしくお願いします。

最近在日の作家、画家、翻訳家の方々の活躍はめざましく、しかもそれが韓国・朝鮮と日本との文化交流にまで発展しているのはたいへん喜ばしく、これらの方々のご努力に深く感謝したいと思います。